

「器用貧乏」は、その主人公にも背景にも、独得の魅力がある作品でした。

主人公の由紀は、有名大学を卒業したものの就職に失敗し、粘土工場でアルバイトをしています。「機械を動かす電気代の方が、私たち落ちこぼれを動かす人件費より高くつく」といった文で表わされている時代背景は、閉塞感に満ちた現代社会の先にある、近未来の情景でしょうか。

日々、「古い粘土をさも新しいかのように四角く形作」っている由紀。工場では月に一回、その月で一番きれいな四角を作った人が表彰されるのですが、彼女は毎月トップです。

表彰されるときの、一瞬の喜び。しかしそのあとに襲ってくる空しさ……。淡々と綴られている、主人公の心理描写にはリアリティがあり、この作品の重量感を増しています。

由紀の同僚の友里は、歌手になりたいという思いを胸に、「信じれば、夢は叶う」という言葉を残し、工場を去っていきます。実は由紀にも、かつて抱いていた夢がありました。

予定調和のストーリー展開であれば、このあと由紀も、自身の夢に向かって一步を踏み出すところでしょう。しかし作者は、別の結末を用意しています。

友里が去ってから一年後。由紀はいまも同じ工場ルーティンワークをしていて、この先もそれは続きそうです。そして彼女は自分の現状と未来を見つめ、こう言い切るのです。「それで、いいのだ」。

その言葉から立ちのぼる、諦念の哀しさ。けれどこの言葉からは、諦念を超えたところにある肯定の強さと、主人公の、生きていく底力のようなものをも感じることができます。

さまざまな読み方ができるとともに、いろいろなことを考えさせられる、深みのある作品。作者が中学生であることに、少しおどろきました。

「ジャック・オ・ランタン」は、ハロウィンにおこなわれるボランティアの劇で、主役のジャックをやるはめになった中三男子、忍の奮闘物語。くすっと笑ってしまうユーモラスな場面の数々と、物語全体に流れているあたたかさが、とても心地よい作品でした。

「ハリネズミのトゲのようなものをザクザク刺す太陽」「ハリセンボンが突進してきたような痛み」などの比喻もおもしろいです。ただ、作者のもっているユニークな感性に、文章力がまだ追いついていないように思います。今後、描写力、表現力を磨いていくことで、より精度の高い作品を書くことができるようになるのでは、と期待します。

今回最終候補に残った作品は、どれも読み応えのあるもので、嬉しく思いました。

惜しくも入選を逃した方も、決してめげずに、自身の作品のなかにある宝を磨き続け、輝きを増していってくれることを、心から願っています。